

---

# 東方珀中夢 ~ Where is a dreamingdream? ~

翁爺さん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方珀中夢 Where is a dreaming dream  
m??

### 【Nコード】

N8675L

### 【作者名】

翁爺さん

### 【あらすじ】

中年のおっちゃんが見知らぬ地に迷い込むお話。

今作は東方二次創作となっております。原作の知識をお持ちの方が分かりやすく面白いかもれません。原作の知識をお持ちでない方が、自己解釈を気にせず楽しめるかの知れませんが、

ある程度推敲した上での投稿をするように気をかけてはおりますが、

やはり本文の変更などが重なることが考えられますので、ご了承  
ください。

では、どうぞ。時間の浪費に過ぎませんが、少しでもお楽しみいた  
だければと、思います。

Stages...opercion 階段のついでにひびいたが。

..... The Macguffin said.....

「

忘れられたものが、

幻想となるならば、

幻想からさえ忘却されたモノは、

何処に行くのだろうか？



Stage : opening「まぼろしとつとつとわかず ひとりうたいぬ。ひ

コッ、コッ、コッ、コッ

歯車が刻む秒針のかすれた音が、八畳間の和室に静寂を強調する。その静寂を作り出しているのは、部屋の中央で静かに寝息を立てる少女。その容姿はこの部屋の様相である、豊、和書を含む雑多な本棚、ちゃぶ台、座布団、ブラウン管、フォークギター、ファミコン等といったやや前時代的なものには不釣り合いなものであった。

緩やかなウェーブが全体にかかった髪は、繊細でありながらも、鮮やかに存在を主張する金糸。肌はぬくもりを生む淡雪で、モンゴロイドではたどり着けない域だろう。そして、今は閉ざされたその双眸には、琥珀に紫を混ぜたような不思議な色合いが隠されている。端的に言えば、人形のような少女である。いや、美少女である。いや、大学生であることを鑑みるに、美女である。

そんな彼女の眠りを妨げるかのように、静謐な空間に音が飛び込む。

扉の開閉音。

「うっつ、さみい！ただいま。」

秒を刻む音。

「あり？メリー？いないの〜？」

足音。

襖を開ける際の、摩擦音。

「おお、気持ちよさそうに寝てますなあ。ほら、メリー起きて起きて。」

穏やかな呼吸音。

「ううむ。やはり起きないか。けどおなか減ったし。寝顔でもお腹は一杯になるけれど、胃袋は膨れないのよ、よよよと。」

無反応。

「仕方ない。メリーさん。起きて下さい。じゃないと窒息しちゃいますよー？」

侵入者は、眠る少女の顔に覆いかぶさって。

刻々。

「ぶはっ。」

少女は顔を顰めると身をよじって束縛から逃れて、息を取り戻したかのように大きく一息吸い込む。

「おはようございます、姫様。お腹の調子は如何でしょうか？」

「うう、ううん…。」スースー

「んむ？ううむ…。」グーグー

その様、まさしく現代の眠り姫が如く。しかし、その眠りを覚ます方法は、やはり御伽噺の中だけであったようである。

「こら、起きないとメリーを食べちゃうぞ。」

ガクガクと体を大きく揺さぶる。実力行使とも言える。最終手段にでたようだ。

うめき声の後、薄っすらと開かれた瞼は、眩しそうに数回シパシパと瞬きを繰り返す。

「おはよ、メリー。」

「おは、よう、レン…。」

「そうですね、愛しのレンちゃんですよ。バイトから還ってきたんですよ。」

「れん？ばいと……？え？んあ、あっ！？」

「おっ」

勢い良く体を起こした少女は漸く脳みそも起動を始めたようである。

「蓮子っ！いつ帰ってきたのっ？」

「たった今。」

「えっ、うそ。もう八時過ぎてるって、あっ、晩御飯が、そんな、寝ちゃってた？」

少々取り乱したとまでは行かなくとも、焦った様子で事態を飲み込んでいく。

「可愛い寝顔で胸はホッカホッカ。後は胃袋だけだね。」

「うあ、ごめんなさい。何だかいつの間にか寝ちゃってて。」

「うん、気にしないよ。で、晩御飯だけど、これから作ると大変だから、今日は外に食べに行こう。」

蓮子と呼ばれた、東洋系の身体的特徴の少女はにこやかに、乱れた金糸を手櫛で梳きながら告げた。

「そう、ね。わかったわ、すぐに準備するわね。」

「ちなみに、私はおでんが食べたいです。」

「なら、いつものおでん屋台ね。」

「今晚は寒いから、体を冷やさないようにしっかりね。」

「はいはい。」

外套を身に纏い準備が終わると、二人は部屋から出て行った。明かりが消え、錠が落ちる音。部屋には再び静寂がもたらされた。

二人が住まうマンションから出ると、外には晴れた星空がのぞけていた。しかし、建築物の高さが制限されているこの街では、空を広く仰ぐことは出来るけれども、街明かりに掻き消されるように星



たちはその主張を潜める。冷やされて澄んだ空には、純粹な黒が随分と幅を利かせているようだった。

そんな夜に、二人は手をつないで歩く。言葉は少ないけれど、その肩は触れ合うほど近くて。その様はまるで温もりを逃さないようにしているかのよう。

件のおでん屋台は、自転車ならそうでも、歩くなら健脚な人でもない限りぎりぎり近いという範疇にあるような距離にある川の、更にそこに架かる橋の袂から、堤防沿いに続く横道の端っこに、つまり、わかりづらい場所に、赤い提灯をぶら下げている。

近くにまで来ると、胃袋に染みる良い匂いが漂ってくる。

「うう、さみつ。おでん屋さん、早速熱燗つけてくれ。」

「おお、いらっしやい。っと、はいお客さん、二千と八百円のお釣ですよ。」

二人が暖簾をくぐるのと入れ違いになるように、先にいた中年の男性が立ち去る。

目が合って、軽く会釈する。

男性を見送ると、男のようなおでん屋台の店主は二人を迎えた。

「やあ御兩人。久しぶりと言う程ではないけれど、よく来たな。今日は天気がいい所為かよく冷える。はい、熱燗一丁。」

「ありがと。なるほど、だからあなたも少し頬が赤くなっているのね。」

二人は腰を下ろすと、共に被り物を脇に置いた。蓮子は黒い中折れのハットで、メリーは白いナイトキャップのようなものである。

前者はともかく、後者は些か普通ではない。しかしビスクドールのような彼女にはひどく似合っている。故に、問題は無い。世界は不平等だ。

「さっきのお客さんがね、なんでも昨日が娘さんの結婚式だったらしくて。んで、話が長いもんだからそれに付き合っって何杯かご馳走になったんよ。」

「ふうん。ほら蓮子。」

「ん。おつとつと、あんがと。んじゃメリーも、ついでにおでん屋さんにも。」

三人はそれぞれ杯が満たされると、同時に呷った。

「くおーっ。さて、とりあえずは卵とガンモドキと竹輪麩とハンペンかな。」

「私はそれに卵もう一個追加ね。大根はちゃんと沈めといてね。」

「はいはい。」

おでん屋が注文通りに皿によそう一方で、蓮子がメリーに話しかける。

「ところでメリー。さっきお昼寝してたときは何か夢見てた？」

この問いは、何気ない会話の中によくある話題の一つに思えるかも知れないが、この二人においては少々その位置では違いが生じてくる。よってこの場を借り二人の紹介も兼ねて、その特異性に触れようと思う。

マエリベリー・ハーン。愛称はメリー。既述の非常に優れた容姿と、先述のナイトキャップに加え、目を引く装飾の紫色のワンピースといった少々珍しい服装を好むことから、どこか浮世離れた印象を与える少女である。のんびりとした性格で、たれ目のせいかなやかな笑みが極めて魅力的だが、精神的には攻めである。

そんな彼女が内包する異常は「結界の境目が見える程度の能力」。それはつまり、彼女の視界には、ずれた位相の存在が映っているということでもあり、さらに極端に言えば、全ての存在が持つ、『縁』が認識できているということだ。

そしてこの能力の影響だと思われるが、彼女にとって夢というものが非常に危険を孕んだものになっている。

現代においても未だ多くの謎が存在し、数多の幻想を呼ぶ夢というものは、彼女の世界ではどのようなものであるか。端的に表すならば胡蝶の夢と言えるだろう。彼女の見る夢は、見ている間は紛れも無い現実となっている。夢想と現実の境界がおかしくなっている

のだ。彼女らは皮肉も交え、夢現の境地と指している。

彼女は、寝ている間に異なる世界を訪れているのではないか、それが二人の見解である。

次に、もう一人の少女について。

宇佐見蓮子。黒髪黒眼の少女である。メリーと同じ大学生であり物理学を専攻し、その才能を如何なく発揮している。メリーと二人だけのオカルト系サークル「秘封倶楽部」の部員の一人でもある。左側の髪がアシンメトリーに伸ばされており、リボンで結ばれているのが特徴的。白いシャツにネクタイや黒いロングスカートなどのモノトーンでシックな着こなしをする彼女は、凜とした雰囲気をもつが、明るく愉快な言動の持ち主であり、精神的には受けである。

そして、この少女もまた、普通とはかけ離れたものを持っている。「星を見ただけで今の時間が分かり、月を見ただけで今居る場所が分かる程度の能力」

言葉にすれば長々となる一方、実際にはそれほどものではないように思えるこの能力だが、異常であることには変わりない。

これらの特異性があるために、普通ではないことの悲運を知る二人は互いに惹かれあい、同情し同棲し同衾し、もう同姓しちゃうんじゃないだろうかという勢いまで来ている。

### 閑話休題。

また、現代科学では及ばない領域にある自分たちの能力に対し、彼女らは自身らの手によって立ち向かうことにしている。それが「秘封倶楽部」なのだ。

その活動として、非現実的な物事を追う二人であるが、その指針の一つとなっているのが、メリーが観測する「異世界」なのである。夢が現実となっているならば、自身が死ぬことさえあるような夢の中の荒唐無稽さは非常に危険であり、恐怖でもあるだろう。しかし眠らないわけにもいかず、かといって夢を見ないですむ手段も未

だ分かっていない。

故に彼女らはある程度の開き直りも込め、肯定的に夢というものに対処していた。メリーが夢という異世界で見た断片的な情報を集め、それらと現実との結びつきを探すことを活動の一つとしていることは、そういった対処の表れでもある。

こつした背景があるが故に、夢を実体験してきたメリーを心配する気持ちもあいまって、蓮子の先の問いとなったのである。

「んー。何か夢を見ていたってことは分かるんだけど、肝心の内容を今回は覚えてないのよね。」

卵をモキユモキユとほおばりながら、メリーは言う。

「そっかー。まっ、何かあるよりは余程良いんだけどね。」

竹輪麩を輪切りにしながら、蓮子が言う。

「何だ、夢の話か？昼寝でノンレム睡眠なら、夢を見ていないことも多いだろうよ。」

菜箸で大根を沈めながら、おでん屋が言う。

「へえー、そんな若い年でおでん屋台なんて渋い商売してるから、てつきり九九も危ういと思ってたけど、そのくらいの教養はあるのね。」

「よーし、お姉さんは今の発言を若年労働者層に向けた挑発と受け取ったぞ。というか、俺は大学生だ。思い知るが良い、次のタネにはランダムでカラシを大量に仕込んでやる。名づけて、不幸の黄色いハンペン。」

「ランダムと言いながらもうバラしちやってるし、この人。しかも名づけはパロディだし。」

「そんなこと言ってる、もう来ないわよ?」

「ちきしょう。これだから、社会的弱者は搾取されるんだ。お客様は神様ですとも!」

そう言っさりげなく煮込みをおまけするところに、おでん屋の世知辛い世渡りの術を垣間見る。

「とういふか、大学生だったのね。それじゃ、この商売は所謂ドイツ語で言うところの学業の傍らに行う賃仕事っていうことかしら。」  
「…ああ、まあ副収入的な意味ではそれであつてる。とういふかましまアルバイトでよくね?」

「ねーねえー、おでん屋さん最近何か夢見たりしないの?」  
「あら、蓮子。大分酔つてきちやつたかしら。」

幾らか幼さを感じさせる蓮子の調子に、メリーが気づく。

「夢ねえ。もう小さい頃の夢は忘れたしなあ。今は一カ月後が何とかなつてそうなら、それで充分だしなあ。」

「いやいや、そつちの夢でなくてさ。いらないよ、そんな灰色の話題は。」

「灰色つて…。御両人に遅くまで粘られるとその分睡眠がろくに取れなくなるから、夢なんて見れないんだがな。」

「あはははつ。今日は寒いから早めに帰つてメリーと一緒に又クスクするけどねえ。ごめんね。」

「なんであやまつたんだろうな。」

のろ気を黙殺してメリーに渡された皿には、ハンペンのみが六つ盛られていた。

「…何かしら、コレ。」

「おや?高等教育を履修した高等遊民のお嬢さんはご存じないですか。それはハンペンといひましてね。白身魚のすり身をこうフワつと…。」

「そうじゃなくてっ!まさかカラシを仕込んでないでしょうね。」

「ハツハツハツ、マサカネー?」

「くう。まさかここにきてコレが出てくるとは。ねえ、数も丁度六つなんだし、ロシアンルーレットよろしく順番に食べていかない?もちろんおでん屋さんも。」

「おつ、食べていいの?んじゃ早速頂きっ!」

「あつ。」

二人の会話を聞いていなかったかの様に、ヒョイと一つ摘み上げ

ると、一口かじって頬張る蓮子。突然の蓮子の行動に短く声を上げたメリーは、その唇に梔子色が付着しているのを見た。

結局、ハズレもとい大当たりをピンポイントに引いたその直後に襲い来る刺激の奔流に慌てた蓮子は、水ではなく日本酒を一気に飲み干してしまい、早々に出来上がってしまったのでしたとさ。その上未だ口内が痺れるのか、先ほどからしゃべる様子も無い。まさに口無しである。ちなみに、他のハンペンには何も細工はなかった。それから、暫く時が流れて。

「蓮子？そろそろ帰るけど大丈夫？」

「そうかい。酔いは大分醒めたさ。けど口がヒリヒリしまふ。」

「そ。じゃ、おでん屋さん、はいこれ。」

「はいよ。ん、丁度だね。毎度あり。そういえばこの前オアイソって使う客がいてね。」

「あらあら。」

「ま、それはどうでもいいか。じゃ、またのお越しを。お気をつけて。」

「ええ、ごちそうさま。」

「じゅっつおさんっ！」

おでん屋台を後にして、帰りの道も二人手をつないで歩く。少しあるこの距離も、腹ごなしと酔い醒ましを考えると、案外適しているのかもしれない。

来るときには多かつた交通量も、今はほとんど無く、行き交う人も見かけない。家の明かりも多くが消されてまばらで、遠くには真っ黒なシルエツトが闇夜に溶け込んでしまつて区別がつかなくなっている。

残されたのは、遠くの繁華街の明かりと、円形に切り取ったかのように周囲を露わにする電灯が等間隔に並ぶのみ。

「ねえ、蓮子。今何時？」

その問いに、星空を仰げば夜もふけ、地上の明かりがちらほらと減った分か、空には星の数が増えているように見える。

歩みは止まらない。

西に傾いた上弦の月はその色を黄色に強くしていたが、彼女の意識からは外れたところにあった。

澄んだ黒はまるで今晚の冷たい空気を、同じ黒色の夜風が、大気圏の外側から運んできているような、そんな幻想を思わせる。

天鵝絨の天幕に銀河ステーション。星降る夜のるなばあく。

「十〇時四八分三十四秒、六、七、八。」

空を、星を、見つめたままに現在の時刻をすらすらと告げていく。星と月に、時と座標を見るその視界には何が映っているのだろうか。

彼女は、その妖しい美しさや、張り詰めた儂さや、おぼろげな瞬きや、凜とした狂気や、そういつたものを感じ取れているのだろうか。そんな考えさえも思考に浮かび上がる。

西の空にはオリオンベルトが山の峰すれすれに見えた。そういえば、蓮子は星の巡りで時が分かるくせに、星座や星の名前も全くと言って良いほど疎かった。

オリオン座ぐらいは分かれよと。

心的距離が近すぎると逆に扱いが疎かになるという、典型的なアレのせいだろうか。

能力があっても時間にルーズだし。

マーフィー的には、家が学校に近い程遅刻する、の法則だ。

気づけば蓮子は既に時を読み上げるのをやめていた。しかし、ただにその視界には、夜空を納めたままにいる。

と。

唐突に、幾度と見慣れた光景であるはずの、そんな蓮子の姿が初めてのような、遠い昔に見たような。未視感を、というよりも違和

感を感じて立ち止まる。

嫌な予感がした。

いつもの“視える”時とは、比べ物にならないほどの、大きさを打ち震えるほどに。

打ちのめされるほどに。

違和感は急激に展開して、深層にまで侵食し、漠然と宙に浮遊するような不安感を生み落とす。

世界が圧倒的過ぎるまでに濃厚に存在感で満たされているような。

世界の全てが自分の知らないモノのような。

世界は瞬間的に過ぎ去ったような。

世界から見つけられたような。

世界に押し潰されるような。

世界を奪われたような。

世界だけいないような。

世界しかないような。

『世界から孤立する感覚』 それは予兆だ。

自分だけが、取り残されて宙空を漂う。

立ち止まったことに気づいた蓮子が、その視界をソラから自分へと降りてきている。

自分の中で、何かが無処か何故か警鐘を鳴らしている。  
戻れなくなる、と。



何処から、何処へ？

答えなど知っていた。

けれど、目を閉じることは出来なくて、放すことすら眼中に無くて。

時間が間延びしていく。

そして、ゆっくりと、半歩前から見返るように、赤みを帯びた黄色を限界まで凝縮したみたいなお黒髪の間から見える瞳は。その姿は。まるで、まるで、あの・・・

あの？

☐

☐

それは津波のように暴力的なまでのイメージの奔流。五感の全て

を塗潰す物量。単純な情報の記録とは異なる、記憶としての書き換え。

□

視界には、断片的にしか映らない程早送りで、けれどそれを補うかのように“新しく刻まれた記憶”が、“思い出さ”れることで、補完されていく。忘れていた筈の知らない知識で満たされていく。思い出してみれば、その全ては自分自身の歩んできた、或いは歩んでこなかった人生だった。歩んでいく人生だった。

蓮子と出会った世界。出会わなかった世界。

蓮子を愛した世界。憎んだ世界。

蓮子を手に入れた世界。奪われた世界。

そして。

蓮子が、いなくなった世界。

□

□  
今までの、今の、そして今からの、その全て。

□

何もかもが、境界の向こう側だったはずの存在。

それが、今は自分の場所となっていた。

自分が、向こうに立っている。

自分は、向こうをこちらに引きずり出して、向こうはこちらを手  
繰りこんだのだ。

□  
そして、押し込まれるイメージの中で、辛うじて残る“自分”が、  
何かに反応して。

□

ぶつん

突如として先程までのイメージの洪水は無くなった。

まるでブレーカーが落ちたかのように完膚なきまで消え去り、その代わりに、まるで擦りガラス越しのように磨耗して、古い映画のように欠落したものに差し代わった。そして驚くべきことに、今度はソレを“眺めていた”。



ああ、そうか

ぶっん

一つの眩きを残して、電源の切れたブラウン管のように、終わりを迎えた。

それは、心から零れ落ちたものだった。

その意味は、果たして何だったろうか。

視界が閉ざされている。

どうやら、自分は瞼を閉じていたらしい。そんなことにすら今さら気づく。

最早その視界には、いつもの闇が戻っていた。

五感が正常になっている。

今はもう、何も変わらない世界がある。つまりは、全て変えられてしまっていた。自分自身だけが。前と後では、境界を隔てて全くの別物の自分だけがいた。

そして、その爪痕もすっかりと残された。

“ 識ってしまった。”

瞼の裏の闇に蠢く何かを見ながら思考を働かせる。

「メリー。“ 視えた”の？」

蓮子が問う。

主観的時間内では永遠のような刹那の狭間に、一体何がその視界にいたのだろうか。

しかし、彼女がそれを語ることはなかった。

彼女の思考はよどみなく継続される。それは覚悟を決めるにも似た作業であった。

正鵠に、刻まれる時を読み取るその瞳は、一見単純そうで、けれどひどく歪な存在であることを、空を見上げる蓮子の、その有様を見るたびに思い知らされる。

「結界の境目が見える程度の能力」という能力は、簡単に言ってしまうえば視覚器官の異常であり、それはつまり世界観の異常である。存在としての根っこからして異なるが故に、その視界は異端なのか。視界が異なるが故に、その存在が異端なのか。それはわからない。けれど、どちらにせよ結果には違いが無い。

故に自分が人間であるかを疑問に思うことがよくあった。しかし、自身にとってそのことは最早大したことではなくなっている。自分には普通が普通であり、異常が異常であることの区別がついているのだから。そしてそばには蓮子がいる。この境地に至るまでには多くの紆余曲折があったが、それは今語ることではないだろう。

ともかく、自分が異常であることを客観的に考察することが可能であるが故に、自分の持つ能力は、自分自身に存在する異常、それが眼球であれ、脳であれ、存在自体であれ、それとなんらかの因果関係はあるはずなのだろうと考えている。

ただ、それがどうして境界が見えるという形として表面化したかまでは不明だが。それはきつと死ぬまで分からないだろう。自分が何者で、何を求め、何を為したかを知るのは、死を迎えるその時のみなのだから。

だから肝要なのは、自身の能力とは、複雑そうに見えて実は、私自身という単純要因に起因する、単純な構造であるということだ。まるで、そこにある造形物がそのまま形となる影絵のように。そこには明瞭な、ただ一本のみの直線が見える。

そう、酔った猫の視界が人のものとは異なることは、当たり前なのだから。

だとすれば、蓮子の能力の歪さが見えてくる。

表面が、簡潔であるせいで、一度その違和に気づくと、余計目立ってくる。解りやすいが故に、疑問が目につく。

なぜ？なぜ？なぜ？

もしも彼女の能力が「月を見ただけで今の時間が分かり、星を見ただけで今居る場所が分かる程度の能力」だったならば、なにもここまで気に悩む必要も無かったのだろうに。

それは夜空の鳥瞰なのかもしれない。

「ねえ。」

「なに、メリー。」

目をゆっくり開いて、メリーが声をかける。答えた蓮子と目が合った。

「あなた、前に私の能力が変わりつつあるかもし知れないって、言っただよね。」

それは問いかけではなく、確認。

「うん、言ったね。メリーの力は境界が見えることから、操れることに変わっているかもし知れないって。」

蓮子がさっきのことを問うてくることは、もうない。既に、分岐は超えたのだ。

再び、歩みを進める。

見える、という事実は、同時にその対象に触れられるという可能性も示唆している。現にメリーは夢において現実と夢幻の境界を越え視覚以外の認知も行っている。また、こちらから見えるということとは、あちらから見えるということでもある。深淵を覗こうとするものは、同時に、深淵からも覗かれているのだ。メリーとむこう側とで、何らかのつながりが生じえるかもしれない。客体と主体の統合と視覚の存在は、そのまま対象への操作性へと変わってもおかしくない。おかしくなかったのだ。

「それはつまり、能力とは私の本質を表してはいるけれど、本質自体ではないということだと思うの。だから能力は変わり得る。」

「それで？」

「あなたの能力はどうなんだろうって、考えてみたの。」

二人の歩みは止まらない。



「率直に言ってしまったえば、あなたの能力には疑問となる点が幾つか存在するのよ。そしてそれは、あまりにも錯綜としているわ。」

まるで、複数の直線が、ねじれた位置にありながら、全ての直線が重なるような視点からでは、一点を通っているように見えるような。

その焦点は、見かけでしかないのに。

彼女は、静かに語りだした。

「まず第一に、月と星のそれぞれが、時と空間のそれぞれと持つ関係。それが逆転していると言うこと。第二に、あなたから出力される時間は、日本標準時だけだということ。そして最後に、星も月も、写真のように間接的になり、夜空全体の一部というように限定されても、適用されるということ。」

「ん？でも、そんな有り得ないことがあるから、『能力』なんですよ？」

「確かにそうかもしれない。けど、その能力を、そう名づけたのはあなただったじゃない。『能力の名前が分かる程度の能力』なんかで分かったわけじゃないんだし。もしかしたら別の能力があつて、それが自動的に表面化した形が、今のあなたの能力でしかないとは考えられないかしら？」

「おお、それじゃもしかしたら、私の能力はメリーのよりすごいかも知れない可能性があるってこと？あははっ、何だか気持ち悪いなあ。」

「もし、そうだとしたらどんな能力だと思う？」

「んん？そうだなあ。つまりそれはメリーがさっき言った疑問点を、合理的に説明が出来るものってことでしょ？」

「その通りよ。」

「むむむ。案外むずかしいね。三つの条件の共通項が中々出でこないなあ。」

「くすつ、変な能力だものね。」

「変って言わないでよ、もう。じゃあそういうメリーはどうなのさ

「?こんなこと言い出したんだから、何か考えがあるんでしょ?」

「そうね。」

「なにになに?」

「聞きたい?」

「そりゃあ、もう。何せ自らが持つ未知なる領域に挑むわけですから。」

「本当に?」

「やだもう、焦らさないですよ。」

「震えてない?」

「だとしても、寒さか武者震いでしょう。」

「そうね。」

「...。」

何だろうと、と。

蓮子はメリーの普段と変わらないはずの様子に、何故か漠然とした不安を感じて、連れられて黙ってしまふ。

二人は既に、自室の扉の前に立っていた。

鍵を開けて中に入る。

玄関の明かりを手探りで付ける。

二人は再び、暗い和室の部屋に戻った。

廊下の明かりは、ここまでは届かない。

最後に入ったメリーが後ろ手に襖を閉める。

まだ明かりが点けられていない部屋は、僅かに窓からさす月明かりだけによつて、何とか輪郭を保っていた。

腰を下ろしていた蓮子の後に、その背後に座ったメリーは、突然しな垂れかかる様に、蓮子に抱きついた。

「メリー?」

いきなりの行動に驚いた蓮子が声をかけるが、答えが返る気配は見えない。

「どうしたのさ、急に。」

数拍の間を置いてから。

その言葉によろやく、耳元でなければ聞き逃してしまいそうなか細さで、話を、再開した。

「…こんなの、ただの思い付きの、無根拠な戯言なんだけどね。」  
それはどこか、自分に言い聞かせるような響きが含まれるのは気のせいだろうか。

静かに、大きく息を吸う音。

「蓮子。あなたの持つ、力。あなたの、本当の能力。あなたの…本質…。それはね…。」

一層耳元に近寄り、吐息が明瞭に感じられる距離で。  
声は震えていなかった。

「それは  
」

暗転

Stage : opening「まぼろしとついでとわかず ひとりうたいぬ。」

サブタイトルはかの有名な詩人兼童話作家の作品をアレンジ致しまして。

憧れだった東方をようやく書くことが出来ました。

おでん屋さんの登場依頼を快く承諾してくださった、篠崎きなこ様には、この場をお借りしまして改めてお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

ご不満やご指摘などございましたら、どうか頂けたら幸いです。

S a t g e : 0 1 「穴に落ちたのか？嵐に飛ばされたのか？トンネルを通り抜

夢が、映像から文字の羅列に変化した。

それは目覚めの前兆だったのかもしれない。

そして、つい先ほどまで見ていた夢を忘れていることに気づくと、唐突に、漠然とした不安感を、居心地の悪い焦燥感を感じた。しかし、強く思い出すとすればするほどにすわりが悪くなり、結果的には覚醒を促すことになってしまい、終に目が覚めると。

幼女が上に乗っていた。

漂白

「：は？」

言葉どころか思考やもろもろを失ってから、ようやくなんとか振り絞って発せられたのは、唯の平仮名一文字だけだった。いや。ただの息漏れかもしれない。

無意味に鼓動が早くなっているのは、突発事象についていけてない焦りのせいか。それとも年のせいか。体中が痺れている様な感じもする。とにかく理解不能、意味不明、意味ぶー、ワケわかめ。

いや、まで。とにかく、落ち着け。

首だけを急いで振り回して、状況の把握をしようとする。

今私は、膝から下をはみ出しながらベッドみたいなのに寝ている。自らの上にそれぞれ容姿の異なる大よそ十歳未満程の少女を三人乗せて。

……。  
取り敢えずこれは置いてく。

で、周りには全体的に全て小さめの、まるでこの少女たちの大きさに合わせて作られたような簡単な家具。それらが収まっている部屋は四畳あるかないか程度の部屋で、小さい丸窓が唯一の光源となっている。そして天井がやたらと低い。多分真っ直ぐ立つことは出来ずに、中腰にならなければいけないだろう。唯一の出入り口らしきドアは閉ざされていた。

感想。

「知らない天井だ……。」

まるで白雪姫にでてくる小人の家を連想させるようだ。木の匂いが強い。杉や檜とは違う木らしい匂いだが果たしてなんだったろうか。壁はそのまま一つの木材の塊を削り貫いたかのように継ぎ目がない。まるでウロのようだが、意匠の技に違いない。そうだろう。そうに違いない。

さし当たって、あからさまに監視している怖いお兄さんがいたり、カメラがあるわけでも、牢獄にぶち込まれているわけでも、身体が拘束されているわけでもないようだ。外の様子は分からないが、特に不気味な物音がするでもない。どうやら身に迫った犯罪に巻き込まれたというわけではないらしい。と思いたい。

さて、ここまで思考を巡らしながら状況を観察して、ようやくだが、少しばかり落ち着きを取り戻せた気がする。心臓は未だ早鐘のように拍動しているが。

よって、置いといたものを拾ってみることにしようか。

目線を自らの上にのっかっている少女トリオにおろす。ぱっと見は、小学校低学年といったところか。一人は堂々と人様の腹の上に伸びて乗っていて、後の二人は降り落ちたかのように、両脇で眠っている。左の方は、手を抱え込むように丸まって、右の方は自らの手を枕のようにして。それぞれは、蜂蜜のような髪をツーサイドアップに結った少女らしい髪型のが私の上で、ゴージャス金髪縦ロー

ルが左、黒髪ロング撫子ストレートが右である。さらにはちよつとオツチャンではびっくりしちゃうような少女少女したドレスのような服を着ており、順に赤、白、青が印象深い。何だか見た目だけで大分性格も分かりそうなのは、気のせいだろうか。

観察を終え、今度は考察を開始する。

もし事態の展開を望むならば、少しでも情報を集めるために彼女らを起こすべきだろう。しかし、彼女らも私のように、唐突にこんなところに放り込まれたとするならば、どうする？

だとすれば、見知らぬ男に起こされると、驚いて何か騒ぎを起こされてしまう可能性がある。それはいただけない。

もしかしたら、私は夢遊病もしくは多重人格障害を実は持っていて、知らない間に自らがこの状況を作り上げたという驚愕すべき事実が。などと意味もなく暴走する思考に、ああ相当参ってるなあ、と冷めて分析する自分がいるとか相当参ってるよ、これ。

だが、果たしてどうだろうか。もしこの状態が第三者の仕業だとするならばこんなベッドのようなところにわざわざ大の男を起こさないように運んで寝かせた上に、重なるように少女を三人も置くだろうか。害意があるなら、より一層ありえないだろう。見張りもなく、閉じ込めるにしても些かユルすぎる部屋でもある。だとすれば、この状況は彼女達が作ったのだろうか。でも、何故に？やはり答えは出ない。

え？まさか本当に自分自身の仕業だったりする？そんな馬鹿な。もしそうならば…。

拉致誘拐監禁未成年略取逮捕取調留置送検拘置取調起訴裁判判決有罪死刑。

なんてこった。これから始まる穏やかなセカンドライフに早くも暗雲が。

と、ふざけた現実逃避もやめましょう。

さてはて、取り敢えず記憶の一番新しいところ。つまりは眠りに就く直前までのことを探ってみるとしよう。回想は、おでん屋台か

ら始まる。

その日は丁度末娘の結婚式からの帰りで、一人きりの家に帰ってきたら無性にさびしくなつて外食したのであつた。そしておでん屋さんを散々付き合わせてから、二人組みの少女とすれ違ふ形で立ち去つたのであつた。若い女性二人でおでん屋台とは珍しいな、などと思つたからか、その事実だけは覚えていた。で、何事もなく帰つて、シャワーは…浴びてないな。今着ている服がそのままだし。そしてソファで一息ついたつもりがそのまま夢の世界へと旅立つて現状に至る。

うーん、と唸る様に考え込む。

ちゃんと自分の家にたどり着いていたのは確かだ。実は家は幻覚で、本当は知らないところにたどり着いてました、なんて話は無いだろう。むしろ今のほうがより幻覚らしい。そうであつたら良いのに。頬を抓る。痛え。

うん、わからん。どうしてこうなつた。

まあ、いいだろう。恐らくではあるが、言い換えれば直感的にだが、今の状態では即時的な危険がある可能性がかなり低い気がするように思われるとだろうと考えられる。といいなあ…。

ならば比較的安全な状況だと判断して良いだろう。というわけで決心する。これでも四人の子供を育てあげた実績があるのだ。何とか穩便にこの子たちを起こすことだつて出来るはずだ。

と、まず上に乗つてる少女を起こすべく、手を伸ばそうとしたときだつた。

「ううん？」

シパシパと、眠そうに瞬きがなされる。

此方の拳動を察知でもしたのか、黒髪の少女が目を覚ました。何もこんな図つたようなタイミングでなくとも。

しかし戸惑い悩む猶予は与えられない。

すぐに向こうもこちらに気づいたようだ。

青玉のように、海とは異なる深く澄んだ濃い青がこちらを捕らえ



て離さない。自然、同時にほんの数瞬、心までも捕らえられた。

既に硬直していたこちらに合わせるように、目が合うと少女も停止する。

まさかと考え、内心焦るが、相手もこちらをじっと見たまま何もアクションを起こしてこない。

……。

一体何だこの張り詰めた空気は。悲鳴とか無い分まだましなのだけれど。

火花が散っていることはないのだが、それでも互いに牽制し合うような視線。いや、少女のものはむしろこちらを観察しているかのような。

このままでは埒が明かないので、ならばと仕方なく話しかけてみようではないか。

何事も対話から。

その時のポイントとして、これから話しますよというアピールとして、わざと口を大きく開けてから発声してみる。

「害意はありません。」

相手が相手で状況が状況なので、なるだけ優しく丁寧に、かつ親しみの感情も明らかに伝わるように喋ろうと意識してみる。いや、結構難しいかと。

相手に特段怯えるような、警戒するような様子は無い。第一接触には成功したろうか。

「目が覚めると知らないところにおいて、こんな状態になっていて、正直混乱しているんです。何か知りませんか？」

「あなた何？」

おっと、まずい。誰でなく何ときたか。やはりこれは、向こうも事態がわかってないのか？

「もしかして、君たちも今の状況が分かってない？」

黒髪の少女はその問いにフルフルと首を振り。

「違うわ。ここは私たちの住処で、あなたがここに居るのは、あな

たを昨日私たちが見つけたから。分からないのはあなたが何なの  
だけ。」

それはつまり、最悪の事態である怖いお兄さん達は登場してない  
と。一応今この場での即時的危険性は無くなったと。そういう意味  
なのだろうか？

顔を伏せ、大きく息を吐く。はぁー。あー、良かった。いや、全  
く良くないけど。謎が未だ多すぎる。見つけたとか、どういうこと  
だろう。

「それで、あなたは何？」

二度目の問いに、今度こそ答えるべく声を発するも。

「ああ、はい。私は「おっ！」」

割り込んだ声に遮られて、腹の上の感触にもつられて目を向ける  
と、蜂蜜の少女も起きたようだった。

「おお、やっと起きたかオッサン！」

威勢よく、爛漫に笑いながらそう言う蜂蜜の少女。

「サニーッ！」

「なんだスターも起きてたの。ほら見て。やっと目覚ましたよ。」

「知ってるわよ。私のほうが先に起きたんだもん。」

「ふうん。で、コレ何？」

「今それを聞いてたら、サニーが起きて邪魔したのよ。」

「何だ、まだ知らないのか。やい、オッサン。お前何なんだ！」

サニーと呼ばれた蜂蜜の少女は、ビシッと私を指差した。

宙にその身を浮かばせながら。

「ジ、ジー……」

ジーザス。最早私の名前どころの話ではない。目の前で一人の少  
女が何の脈絡もなく自力単独飛行を実現しているのだ。あまりにぶ  
っ飛んだ展開の連続のせいで、魂も魄も吹っ飛びそうな心地がする。  
え？手品じゃねえの？マジで飛んでんの、これ？

手を少女の周囲でいろんな方向に振っても何の感触も無い。つー  
か、ふよふよ微妙に動いてるんすよ。これじゃ、ワイヤーで吊る

したりは無理だよな。ほんでもってね、背中て羽のような何かのパタパタと羽ばたいてるんだ。薄暗くて気づかなかったけど、よく見れば透明に近い昆虫の羽根のようなものが、確かに見えますねえ…。そこで、ばつ、と今度はスターと呼ばれた青玉の少女を見れば。

「パ、パ…。」

パピヨン。蝶のような形の、薄い羽が見えました。

「ねえ、スター。こいつの名前何なんだ？ジジイか？それともパパか？」

「どつちだろう？」

残念ながら少女二人の会話は、耳に届かない。

ここまで来るともう引けない。金髪ロールの少女にも目を向けてみれば、そこにはやはり、蜉蝣のような薄く細い羽が見えた。

本物だろうか？その疑いがどうしても払拭できず。その蜉蝣のような羽に手を伸ばす。左右に生えた二対の内、大きいほうを指でツツとなぞってみる。

「ふにゃあう。」

鳴いた。鳴きおった。

どつやら感覚があるらしい。今度はそつとつまんで、持ち上げってみる。

「うなあ、うう…。」

再び唸るように鳴いたが、すぐに静かになった。持ち上げられたまま寝息を立てている。

さてと。

頭の奥のほうに熱を持ったように、鈍くジンジンとしているが、視界が立ちくらみのように明滅しているが、整理してみよう。ここまでのことを。

見知らぬ場所。小柄な少女。自然あふれる住処。羽で飛ぶ。これらから推測できるものは？

結論 妖精の世界に迷い込んだようです。

…ふむ。

すこし深呼吸してみようか。

すうー、はあー。すうー、はあー。すうー…

はああああああっ！

おっと。八つ当たり気味に最後の吐息を盛大にしたら、何だか気合を溜めてるみたいになっちゃったよ。

そのせいで、おっさんの行動を奇妙がって注視していたチビツ娘たちを驚かせてしまったようだ。別に威嚇のつもりはなかったのだが。

「驚かせちゃったかな。ごめんね。」

ともあれ、取り敢えずは優しくしなければ。こういう”人外“が当たり前が存在する場所では、常識（人の法）が通じないことの方が当然なのだから。得てして物語の中では、人はよくそういった存在と対立する存在として描かれ、比較され、その愚かさが風刺されるが故に。

そしてそんな打算なんかより、こんな小さい子に厳しくなんて出来ませんとも。だっておっさんも子持ちなんだもの。自分の子が小さい頃を少しでも思い出しちゃったりしたらば、もうとてもとてもに、してもだ。

まさかこの年になってから、異世界迷い込み系ファンタジーもとい、神隠しに遭うとは、コレいかに。こういうのは鉄板で見目麗しい少年少女の目くるめく冒険活劇だろうに。なぜ中年をも超えて老年に片足突っ込んだおっさんがそんな目に遭うかね。

おっさんでは、年のせいかな、あの世が近いからかは分かんないが、所謂オカルトに分類され得るようなものすら、ある程度すんなりと受け入れられるんだが。

（『わあっ。実は人間じゃありませんでした。』

『へえ。』

『わあつ。ここは現実ではありませんでした。』

『ほう。』

『わあつ。驚けつ。』

『ふうん。』

『……。』

こんな物語の何処が面白いと言うんだ。

それとも、あれか。新しいジャンル開拓か。昨今のドタバタものから、緩い安心設計ものへの転換期だろうか。

いや、それとも…。背景設定的な意味での犠牲だろうか。主人公たる美少年美少女達が巻き込まれるための伏線的なアレである。

（『市、で某さんが一週間前から行方不明になっています。これで今月に入ってからの市での失踪者数は十人を超え、警察のほうでは連続集団失踪事件として…』

『へえ、不思議な事件だなあ。』）  
という、一連の流れ。そのためだけに必要な哀れなおっさん。という可能性。

世界は理不尽だ。まあ、今に知ったこつちやないわけで。既にそういう事態になっている以上は、足掻くには遅すぎる。

仕方ないから、そういう時は開き直ろう。それがおっさんの性分でもある。

なんとかなるさ。なんとかならなくても、別に良い。

おお、改めて言葉にすると何か急に平静を取り戻せた気がする。

ぶつちやけちやえは、最後の気がかりだった末娘も先日漸く嫁にいったわけで、後の憂いが無くなってしまっている上に、気がかりや未練などが完膚無きまでに存在しないのもあって。こういうのもありかなとか思わなくもない。

父親が突然いなくなっても、長男がなんとかしてくれるだろう。育て方を少し間違えちゃったかもしれないが。まあ、過ぎたるは及ばざるが如しとは言っても、大は小を兼ねるということ。きつと大

丈夫。どちらが強いかわからないけれど。何が強さの基準かも知らないけれど。

さて、そうと心が決めれば後は強い人なんですよ、おっさんって意識水準を思考の海からサルベージして、目の前に意識を傾ける。そして、未だに驚きが抜けてないのか、妖精を驚かせるとは中々、とかなんとか先ほどから唸ってるチビツ娘に向かって笑顔を向ける。

「それじゃ妖精さん方。」

取り敢えずは、まあ。

「自己紹介。しましょうか？」

#### (場面跳躍)

#### (視点転換)

#### (時間逆行)

ここは中年が迷い込んだ世界の外れ。無縁塚と呼ばれる秘境の中の魔境。紫の桜に囲まれた小さい野がそこにはある。その地には、名前の無い、唯の石が置かれただけの墓標が幾つも並んでいた。

まるで、その場所自体が死んでいるかのような、静的で幽玄な空気を漂わせている。

そんな怪しさと、儚さが、美しさとして共存する場所は、単純に『存在する』ということ自体が阻害されて困難となる、非常に危険なところでもあった。故に物音は、時折吹く風が立てる、草木のざわ

めきのみ。風に流されて、涙のように散る紫苑のような色合いの花びらを眺める存在は、美意識なき石木だけであった。

その筈であった。

いつの間にか、紫の桜の下に佇む影が一つあった。いつの間にか、その桜は既に紫ではなく、唯の普通の薄紅であった。いつの間にか、その桜の木には小鳥たちが止まっていた。いつの間にか、そこは命あふれる自然となっていた。いつの間にか、そこは“普通”の野になっていた。

そんな異変に気づく欠片も無い様子で、その桜の美しさに目を引かれることも無い様子で、その一つの影は唯一その場の過去を残しているかのように、幽鬼のような足取りで、その場から離れて行く。その時。

一陣の風が吹いた。包みこむようにその影を通り抜けると風は、空へと舞い上がった。風は空を流れて、森を越えて、何処までも駆けてゆく。そして、森の中にひっそりと佇む一つの家も通り過ぎた。開け放たれた戸を潜り、そよそよと、その家の一室で眠る人物の顔をなでる。

金糸のような髪を持つ、美しい女性だった。

するとその人は、唐突に、まるで今まで本当は起きていたのではないかと思わせる程、余韻を残すことなく覚醒した。

紫水晶のような瞳はスウツと細められ、双眸からは研ぎ澄まされた光が零れる。

「何かしら。何か来たわね。」

ゆっくりと、気怠げに、悩ましげに、上体を起こす。

「他の存在に紛れて、碌でもないものが紛れ込んだかな。」





S a t g e : 0 1 「穴に落ちたのか？嵐に飛ばされたのか？トンネルを通り抜

アリス・ドロシー・千の順番です。

改訂、推敲、付加、改竄。いろいろ読み直すたびに修正を加えるために、投稿は超鈍急となるでしょう。さらに言えば、既に投稿済み部分につきましても、細かい修正がたびたび入っておりますので、ご了承願いたいと思います。

そして最後に、『Omegaの視界』すげえ。

## Stage : 02 「三光ゲーム」

「…はあ、はあ、おーい。お嬢さん方。少しは待ってくれんかね。」  
「なによもうへバってるの？」

「ま、ただの人間には大変かもね。」

「というより、年齢じゃないかしら。」

おう、言いたい放題か。こっちは長年デスクワークばかりだったから突然の森歩きは大変なんだけども。しかもある程度手入れされた里山ならまだしも、こんな場所じゃなあ。彼女らのねぐらになっていた巨木から離れるほどにどんどん茂っているというか、既に極相なんですが。えらい原始林だな。

「しかし、そのムエンツカとやらにはちゃんと着くのかい？」

尋ねた場所であるムエンツカとは、無縁仏の無縁と貝塚の塚で無縁塚というそうな。この摩訶不思議世界の一角にあると言う、なんでも、『不思議なものがよく落ちている』場所、らしい。

あの後自己紹介を済まし、彼女らの名前について蜂蜜の少女がサニミルク、金髪縦ロールの少女がルナチャイルド、黒髪の少女がスターサファイアということが漸く分かったのであった。名前に編みこまれたものから分かるようにそれぞれ順に日光、月光、星光の妖精らしい。

三光のネームバリューに、初めはほうほうと感心して実は実体化と言語干渉が出来るスゲエ存在なんじゃないかと思っただが、そんなことは決して無かった。むしろ普通らしい。というか彼女らいくどごその氷精の方が妖精として規格外の力を持っているらしい。ううむ、良くあるファンタジーモノはやはり、絵空事の域を出ないのだろうか。

「安心しなさいな。この森は妖精である私たちにとっては庭みたいなものなんだから。」

「一応道もあるらしいけど、私たちは使わないで真っ直ぐ行くからむしろ早く着くはずよ。」

「惑わすはずの妖精の道案内つても何か不思議ね。」

「…惑わさないでちょうだいね。」

自己紹介後もこの地について色々と情報を得るべく対話を試みるのだが、正直成立していなかったと思う。少女たちの会話の節操の無さは愛娘達の経験上十分に承知しているのだが、妖精たちの場合さらにたちが悪い。話題というか集中の先が変わると、その前のことをケロツと忘れてしまうのだ。路線の修正を図ろうにも

（「あれ、そんなこと話したっけ？」

「さあ？」

「そんなことより…。」

この三連コンボにどれだけ苦しめられたことか。おっさんの存在自体忘れられないか戦々恐々としていたのは内緒です。

「こうやって“がむ”と言うのだったかしら。珍しいお菓子を貰えたんだもの。そこまで不義理ではないつもりよ。」

勿論梅味の板ガムである。

「最近無縁塚に言っただけだったから何かがあるかもだしね。」

「まあ、妖怪に襲われたらその限りではないけどー。」

「待てい、妖怪なんぞが出るのか。」

仕方ないからいろんな分野の話題を振って、彼女らの雑談を傍聴する方式に方向転換してから暫く。本当にどういう訳か、彼女らの所有物について鑑定する流れになった。

どうしてこうなった？

確か美味しい食べ物話題から各々の嗜好に移り、そこから魔跳躍したんだっただか。問題なのはそうして見せられた品々であった。

いやー、ほんと参っちゃうよね。綺麗な石とかいって見せられたのが馬鹿でかい琥珀でさ。中身がどう見てもメガネウラ・モニーなんだもの。そのほかに玉石混交いやさ、魑魅魍魎の数々。そして発覚したりアル・シルヴァニアファミリー。まさか自分が木の中に

いるとは。あまつさえ外から見れば変哲の無い巨木とか、意味分かんらん。笑うしかない。

現実逃避気味にさり気無くまわりを見回したそんなときだった。荷物をまとめて包んでいた布に目を奪われた。

紅白の横線が十三本に、左上が青い四角に塗り潰され、その中には五十の星が並んでいた。

見間違っはすが無い。

ここにあるには不自然すぎるもの。

なんと星条旗だったのだ。

即座に彼女たちから聞きだして、森で拾ったものと判明。しかも、その拾った場所にはそういった『不思議なもの』がよく落ちていらしい。

当然、その場所への案内をお願いして今現在に至るといっわけである。

「何を言ってるのよ、当たり前じゃない。」

「いくら無縁塚と言ってもその周りは何の変哲もないしね。」

「このくらい森の奥なら妖怪は居て当たり前。」

「…おい。」

正直、この不思議な世界に訪れてからアリエナイものはよく目にしたが、それと同じぐらいに元の世界との共通点にも気がついていった。文明が少々古くはあるが、それでも見覚えのある、つまりかつての日本を思わせる物品が数多く、極め付けが唇の動きと新聞の文字から判明したことであるが、日本語を使用しているという事実だった。良くある自動翻訳や欧州文化というファンタジーの王道でもタイムスリップとも違うらしい。さり気無く使った横文字も通じていたし。

さて、そうなってくるとどんどん分からなくなってきた。全くの異世界かと思えば不自然は符号。案外漫画でよくある平行世界とか、同じ地球上にある裏世界とか、交流のある異世界だとかなんだろうか？だとしても。

「妖怪とか、急に明瞭な危険性を示唆されてもなあ…。」  
対処云々の前に、実在するのかよという気持ちが無きにしも非ず。確かに妖精がいるなら居ても可笑しくないんだろっが、妖精である彼女らがあまりにもこう、なんと言うか。

「うわっ。」

「あはははっ、ルナは相変わらず鈍いねえ。」

「くすっ。何も無いところで転ぶんじゃあね。」

「いたたたあゝ、って。あれ？」

「どうしたの？」

「？」

「どうしようっ!“がむ”飲み込んだじゃった！」

「ええっ、“がむ”って飲み込んだじゃ駄目なんですよ!？」

「早く吐き出さないと!えーって。」

「うう、そんなの無理だよお。」

「もう、それじゃどうしたら。」

「と言うか、どうなっちゃうのかしら。」

「そりゃ、あんなに嘔んでも溶けない以上はそのまんまお腹の中で

詰まって…。」

「いつかボンツ？」

「うっううう、いやだよゝ、何とかしてよゝ。」

「何とかって言うてもねえ…。うゝん。」

「そっだジジイ!どうしたら良いの!？」

「パパさん!助けて。」

「うっうう、パパあゝ。」

「……和むんだよなあ。」

しみじみ。

「おやおや、そんな涙浮かべちゃってまあ。ほら大丈夫だからおいで。」

そう言ってヨタヨタとよってきたルナちゃんを抱き上げる。

「いーっ、よいしょ。はい、あーんしてごらん。」

「あー。」

「どれどれ、ふーむ。ルナちゃんどこかお腹でおかしいところはある?」

「いや、特には…。」

「なら問題ないね。ガムは消化されないけど小さいから体の中で詰まりはしないよ。」

目に見えて安心する三妖精。

「だから小さかったのね。」

「結構危険な食べ物もあるものね。」

「私はもう食べなくても良いわ…。」

「さて、それじゃまた案内をお願いするよ。」

「どこに?」

「何言ってるのサニー。これからウサギ狩りに行く予定でしょ。」

「違うわよスター。家に帰るところだったでしょ。」

「君たちに無縁塚まで案内してもらってたんだよ。」

「ああ、そういえばそうだった。さあ、こっちよ。」

ツッコまないし、挫けてもいけない。最早慣れたいうか気にしないことにした。

「やれやれ、かな。」

「フーか、妖怪の話はどうなったよ、自分。」

… 案外他者のこと言えないか。そろそろ健忘にも気をつけないといかないなあ。

「あー！ルナばっかり楽しんでズルイっ!」

抱っこしたまま歩いていたら、不平等を訴える抗議の声。

「労働条件の改善を欲求する！じゃないとストライクするぞ!」

「ストライクじゃなくてストライキね。」

なーんでこんな言葉と概念は知ってるのかなあ。わりとマジで。

「ほれ、それじゃおんぶでも良いならおいで。」

前にルナちゃんを、後ろにサニーちゃんを装備する。

おっさんの速さがさがった。体力がさがった。疲弊が上がった。

モチベーションが上がった。

「スターちゃんはどうする?」

「いざというとき逃げづらくなりそうだから遠慮しておくわ。」

案外腹黒いのかもしいれない。いや、気遣いの出来る子なのだろう。

「いざがあるのか。やっぱ妖怪?」

「そうねえ、それに獣も少しはあるかしら。」

「うへえ、ちなみ何が出るんで?」

「この辺りだと屍肉を喰らいに狼ぐらいは出るわね。」

「ほー、狼か。ん?まさかとは思うけど人を丸呑みできるぐらい大きかったりしないよね?」

太古の森のヤマイヌのカミみたいな感じで。

「大口真神じゃあるまいし、そんなのが居るとは聞いたことが無いけど…。」

「大ガマが居るんだし、知らないだけだったり?」

「大蛇も大ナマズもいるしね?」

ちよつとだけ遭ってみたいと思っってしまった。黙れ小僧とか言うて欲しい。

…… おおオオン

「あ?」

「い?」

「う?」

「え?」

ノリ良いよね。

「今のつて、あれかい。噂をすれば赤ら顔の云々と言う。」

「あら大丈夫よ。例えこつちに来てても私が居るから近づけば分かるし。」

「そうすれば空に逃げれば良いしね。」

「狼が妖精を襲うとはまず考えられないけど。」

「おっさん、空飛べないんだけど。」

出来ることなら飛び方を教えて欲しい。舞空術に憧れた少年時代を過ごしたんだ。

「そういえばそうだったわね。どうしようかしら？」

「三人がかりならどうかしら？」

「一応持てはするけど、それで飛べるかなあ？」

そういえばおっさんをあの巨木まで運んだのは君たちだったね。というわけで両腕と襟首を掴まれて引き上げられる。

ぐうえ。ちよいと首が苦しいけれど、おお、浮いた浮いた。

「ほら、私たちが力を合わせれば人の一人や二人。」

「パパさんが軽いのかもね。」

「骨と皮だけだしね。」

年だから。あと現代社会のストレスとか色々。食事とか気使ってるのよ。

「あら？」

「どうしたのスター？」

「何かこっちに来るわね。しかも複数。」

「さっきの狼かしら。」

「できればこのままやり過ごしていただきたい。」

「それなら追い払ったほうが早いわ。」

「いや、そんな危ないことはしなくても。」

「わざわざ近寄ったりはしないから安全よ。こうやってね！」

そういうとサニーちゃんは右手を適当にかざす。

するとどうだろうか。複数の光弾が飛び出て、その先にあった木の葉を散らした。

…。あれか、妖力だの霊力だの気だのオーラだのチャクラだのとかいうあれか。不思議パワーで敵を倒すあれか。手からエネルギー弾を出すのは美少女の基本スペックか。

いい加減何でもありになってきたな。つまり『有り得ないは、有り得ない』というあの文言を連想させる。ふーむ。ここまで来ると



逆に少年時代の憧れもしくは、漢の浪漫が実現してくれないかと願ってみる。

「来たわね。」

そういったスターちゃんの声につられて下を見下ろせば、茂みの陰に僅かに見えるシルエット。どうやら中型犬ぐらいの大きさしかないようだつて。

「おいおいおい。オオカミつてまさかニホンオオカミか?。」

小さい耳と吻。足が比較的長く、茶系の毛色に後ろ半身には白の乱れ模様。

学生のころに見たことがある剥製の、生きて動く姿が目の前にあった。

「えっ、本物か?それともクローン?ジュラシック・パークや冷凍マンモスの類か?。」

「何言ってるのよ。昔から狼は狼に決まっているじゃない。」

「うわあ。あかん。おっさんは今、猛烈に感動している。」

狼と言えば格好良い動物の象徴であり、少なくとも憧憬があるもので、その純国産であるニホンオオカミと言えばそりゃ思い入れも一入。しかも既に絶滅しており、個体が存在してしない。なのに、それが今目と鼻の先にいるという事実にはテンションがすごいことなってる。

それでも表に出さないのは年の功ではある。

あれ?ちよつと待てよ。ニホンオオカミがここに居るということはやはりここは日本とつながりがあるのか。いやまて、遠目に見たからまだニホンオオカミと決まったわけじゃない。せめて頭蓋骨があれば。そもそも何故絶滅したはずの動物がいるんだ?と、妖精たちに見せられた琥珀を思い出す。

まさか。

ここには既に絶滅した生物が生息しているのか?それ一体どんなSF(空想科学)だ?いやむしろFT(幻想伝奇)か?そんな物語をいつかどっかで読んだことがある気がするぞ。人が知らない動物

だけのユートピア。ロストワールドだったか。

よもや、ねえ？

「ほら、あっちいけ！」

サニーちゃんが謎エネルギー弾を撒き散らす。すると狼たちはすぐさま奥のほうに消えていき、とうとう姿が見えなくなった。

狼といえば獲物を狩るのに一週間以上かけて追跡することもあるらしいが。このあっさりした様を見せ付けられると疑問に思う。ふむ。やはりあの謎エネルギー弾に対して野生の勘でも働くのかね。「うん、みんな遠くに行つたみたいね。辺りには大して何もいないわ。」

「そっか、三人ともありがとうね。おかげで助かったよ。」

ほっとする反面、残念だと思うのは仕方ないことだと思う。アラス力での経験を生かして、仲間にも入れてもらえば良かったろうか。

「ふふん。こんなの楽勝よ。」

「それよりも早く行きましょう。」

「そうね、また何かに来られたんじゃ、中々先に進まないもの。」

そうして地上にクレインゲームの商品のように運ばれる。しかしサニーちゃんとルナちゃんは手を離さず、そのまま再び抱えられる格好におさまった。

「あとどれくらいで、無縁塚とやらには着くのかな。」

「大分歩いたし、多分十分もかからないんじゃないかしら。」

「それは有り難い。流石にもう疲れてきたよ。」

絶滅した動物がいるなら、絶滅した植物も。なんて思わなくも無いが、そこまで気を配れる余裕が体力的にも精神的にも無い。流石に恐竜やクックソニアまで出てきたりはしないだろうし。インドリコテリウムとか漸新世あたりの生物も勘弁して欲しいものだ。

…いないよな。下手に変なフラグとかになつてないといいけど。

「ところで、無縁塚が具体的にどんなところか未だ聞いていなかったけど。」

ただの開けたところだとしたら、ギャップと思って通り過ぎてしまいかもしれない。

「あんまり大きくは無いわよ。ただ桜の木が幾つかあって。」

「春には紫色の花をつけて綺麗なのよね。」

「秋には彼岸花で真っ赤になって見物だしね。ああ、あと一応墓石も転がってたりするよ。」

おっと急に不吉なイメージが付加されたぞ。墓石は流石に直接的過ぎる。

「幽霊とか出たりして。」

「あら、よく知ってたわね。」

「私たちもそこでは他に死神くらいとしかあったことが無いから。妖怪も近寄らないし。」

「あんまり知られてないと思っていただけだね。」

はい決定。死神という単語が聞こえました。どう考えてもろくでもない場所にしか聞こえない。というかいきなり死神とか顕著に異彩な存在が現れるなよ、頼むから。

「死神とは何てこった。とうとうこの老いぼれにもお迎えが来なすつたかな。」

「わざわざ迎えをよこすほどのことかしら。」

「というか、確かただの船頭だと言ってた気が…。」

「話してみても、そんなに怖くなかったしね。」

「またも裏切られる予想。常識が通じない。」

「まあ、危害を加えられないというなら、おっさんは良いんだけどね。」

できれば居ないでほしい。けどちょっとだけ見てみたい気も…。

「いいからさっさと歩く！」

「そんなんじゃない日が暮れちゃうよ！」

「ういっい。」

「それじゃ、こっちよ。」

まあ、たしかに悩んでも意味ないよな。

促されるままに、スターちゃんの先導に従い、のそのそと森の奥へと歩みを進めていく。

そうして歩き続けて暫く。

「そろそろね。あの茂みを越えたら着くはずよ。」

「おー。とりあえず、着いたら休んで良い？もう足が棒のよう。」

「別構わないわよ。」

「んー、じゃ私は先に行ってるからね。」

「あ、サニー待ってよ、私も行く。」

おっさんの装備が外れた。体が軽くなった。

「走るところぶよー。さて、スターちゃんは行かなくても良いの？」

「それがね、いつもは無縁塚には何の気配もないのに、今は何故か僅かにだけど色んな気配を感じるの。小さすぎて直前でようやく気づいたんだけどね。」

…それはつまり、様子見に行かせたと。異変に気づいていながら黙っていたと。いや、そんなことはないよな。

「大丈夫よ。妖怪は私たち妖精を襲うことなんてあまりないし。そもそも危ない気配はこんなに希薄ではないはずよ。」

ほら、やっぱり腹黒とか気のせいだったんだよ。けど、おっさん何も言っていない筈なのだけれど？

「…」  
「そして上機嫌なハミングである。」

「ちよつとスターっ！！早く来なさいよっ！！」

「なんかおかしいよっ！！」

前のほうから先行した二人からお呼びの声が聞こえる。何があったし。

「呼んでるね。」

「呼ばれているわね。」

それでもスターちゃんはペースを変えることはないようだ。きつと疲れたおっさんに気を使ってくれているのだろう。

「二人とも一体どうしたっていうのよ、そんなに騒いで。幽霊が宴会でもしているの？」

なにそれシユール。

「いいから早くっ！」

茂みの向こうからせかさす声。

どれどれ。

ガサゴソと茂みをかき分け道を作る。

「どうぞ、スターちゃん。」

「あら、ありがとう。」

さてはて、不思議生物な彼女らが戸惑う不思議とはどれ程のものか。怖いもの見たさも無くはないが。

「これはっ…!!！」

「ん？」

やけに驚いているスターちゃんと挙動不審な先行組。

ふむ、確かに話に聞いていた通りに墓石が転がる原っぱだ。桜の木に囲まれて、なるほど春には大した咲き誇り振りを見せてくれるだろう。

しかし。

そう、しかし、それだけだ。

幽霊もいなければ、なにか暗鬱とした雰囲気があるでもない。普通に鳥が囀り、虫が潜む、よくある光景だ。

彼女らが今のように訝しがっているような、不思議な点は見当たらないのだが。

「おーい、サニーちゃん、ルナちゃん、スターちゃん。ここが無縁塚かい？」

その問いかけに三人は眉をひそめた、困惑の表情で答えた。

「その筈なんだけど…。」

「スターが道を間違ったんじゃないの？」

「けど道順はあったはずよ？それ一応景色だけなら一緒なわけだし。」

煮え切らない回答である。

「何がそんなに疑問なんだい？普通の原っぱじゃないか。」

「それがおかしいのよ。」

「幽霊が一匹もないし。」

「ほかの生き物だっているわ。」

へえ、幽霊つて匹で数えるんだ。

「ああ、なるほど。つまり普通じゃないのが普通なのに、普通になつていて、そんな普通でない状況だから普通であることを不思議に思っているんだね？」

「？」

「??？」

「????？」

そろえて首を傾げられる。さんようせいはい、こんらんしているよ  
うだ。

「本来なら、もっと違う状態なの？」

「うん…、もっとこう。」

「薄いつていうか。」

「フニヤクチャていうか。」

「……ねえ？」「」「」

わからんがな。

「結論を言つと？」

「不思議な場所じゃなくなった。」

「不思議なものが落ちていなくなった。」

「不思議がどこかにいつちやった。」

うーん。星条旗の例からして、今までこの世界で不思議なもの  
おっさんの世界のもの、という考え方でいたわけだ。しかし、その  
不思議なものが無くなったと。それはつまり、手がかりが無くなっ

たということですか。参ったな…。

「なにかないか一緒に探してもらえないかな？」

それでも一応探索をするのは基本ですよ。アイテムが落ちてるかもだし。

「う、うーん。」

「そうねえ…。」

「ええー。」

おや、みなさん。乗り気でない様子。ルナちゃんに限ってはあからさまに嫌そう。宝探しのことは好きだと思っただのに。

「なんていうか、あんまりこの場所って居心地が良くないのよね。」

「そうそう。すわりが悪いっていうか。」

「場違い？」

おっさんは別にそんな感じはしないけれど。はて、妖精避けの効果でもあるのだろうか。妖精ホイホイ？いや、逆か。妖精バイバイ？

「気疲れする感じかな？」

コクリとうなずかれる。

おっさんとしては休憩した後に探索したかったのだが、小さい子に無理をさせたくはないなあ。

初期イベントには結構重要なアイテムがあることが多いんだけど。仕方ないか。また来れないわけじゃないし。

この距離を再び歩くのは憂鬱だが。

「そっか。それじゃちよつと休憩したら戻ろうか。どうにもおっさん疲れちゃってね。」

可能なら水分補給もしたいが、水場らしき場所は見当たらないし、乳酸溜まると億劫だからちよつとだけだ。

「うん、まあそれくらいなら。ねえスター？」

「そうね、別に苦しいわけじゃないし、ねえサニー？」

「そうなんだけど…。」

歯切れの悪い返事。どうしたのかと、サニーちゃんに目をやれば。  
クウウ

可愛い音が聞こえた。

「ふふっ、やだサニーお腹がすいたの？」

「クウウって、あはは、お腹までそんなに“食う”ことを主張しなくてもっ。」

「もお！うるさいうるさいっ！良いじゃない！体動かしたんだからお腹もすくわよ！」

「そういえば、おっさんも何も口にしてないなあ。やばい。意識したら胃を締め付けるような空腹感が。」

「そうだねえ、おっさんもお腹すいてきちゃったなあ。」

「おお、だよな！ほら、ジジイもお腹すいたってっ！」

そしてここぞとばかりにおっさんを味方に引き込むサニーちゃん。確かに、そろそろ丁度いい時間かもね。」

「それじゃ何が良いかしら？」

ふと不安がよぎる。彼女らの主食って、人間でも食えるものだよ  
ね？

いやほら、よくわからない魔 力とかの補給で十分だ、なんてこ  
とすら考えられる。」

そもそも森で生活という時点で食事に虫が含まれる蓋然性は高い  
と言えるだろう。毎年ジャングルに調査に行く知り合いが、よくふ  
ざけてそういったお土産を持ってきていたのを思い出す。どうやっ  
て検疫やら空港での検査をパスしているのか、いまだに疑問だ。

おっさんも蜂や蝗なら問題なく食べられるんだけどなあ。流石に  
それ以外は、ちよつとなあ…。あと生食はどうあがいても無理です。  
「ここからだ、そうね。少し回って中有の道の方に行つて、何か  
食べ歩こうかしら？」

「それも良いけど、この前盗ってきた料理が未だあつたじゃない。」

「うーん、けど、お腹が減っているからこそ、人里に新しいものを  
求めに行くとかは？」

「そういえば、この前食べたドジョウ鍋は意外に美味しかったわよ  
ね。」



「そのあと土鍋が飛んできたけどね。」

「あそこの四辻にある茶屋の団子もおいしかったなあ。」

「そのあと物凄い頭突きを喰らったけどね。」

「ヤツメのかば焼きも定番だよね。」

「そのあと串が飛んできたけどね。」

「以外にグルメかつアクティブなんだね、君ら。」

「ん？というか今、人里っていつてなかった？」

「人里だつて？」

「そうよ。妖精だつてちよくちよく行くんだからね。」

「まあ、人間の貨幣なんて持っているわけないから。」

「食い逃げる訳だけど、無事でいた試しがないわ。」

「やれやれ、といった様相の三人はさておき、新しい情報を吟味する。」

まず人里、ようは人間の生活地域があるらしい。そしてそこは貨幣が一般に流通する程度には文明があつて、かつ彼女ら妖精のような不思議存在が入る程度なら問題がないと。ふむ、食い逃げの話から予想するに人間側のルールを守れば共存さえしているということだろうか？

などと思索を張り巡らせているものの、結局知りたいのはおっさんがその共同体に入ることが出来るかということだ。願わくば何がなんでも入れてもらいたいものだが、主に安全面での危険から。

しかし、恐らくであるが閉鎖型であろう共同体は、外部の人間に対して決して友好的ではないというのは身をもって知っている。同じ日本人同士ですらそうだったのだから、全くの異邦人に対しては推して知るべし、といったところか。樂觀はできないよなあ。最悪、人間の方が敵にまわったりして。

…そうならないことを祈ろう。案外神様だつて実在するかもわからないかな。

「おっさんも入れるかな。」

「人里に？え、もしかして、パパさんつて…。」

「妖怪？」

「人外？」

ササツ、といった素早さで距離をとられる。

「そんなことないから。人間だから。ホモ・サピエンス・サピエンスだから。」

「…ほ、ほも？」

そこだけ拾うんじゃない。

「やえやれ、まあ良いか。それじゃその人里まで案内をお願いしても良いかな？」

もう『なるようになれ』で行くしかない気がする。その通りだから困りもする。

「いいよー。」

「どうせ暇だしねえ？」

「誰かさんは食気にあてられてるみたいだけど。」

「もうっ、ルナあっ！」

追いかけてこを始めるサニーちゃんとルナちゃん。

相当歩いたというのに元気なものである。

なるほど、これがキャツキャウフフか。

間違えた、若さか。

「先に行きましょう。どうせすぐに追いつくわ。」

「ん、そうかい？」

「ええ。」

そういうスターちゃんに手を引かれて歩み始める。

「おいてくよー。」

何故か追う追われるが逆転している二人に声をかける。

「ああっ！待ってよーっ！」

「こらっ、先に行くなんてズルいよー！」

まさしく飛んできた二人が再びおっさんというプラットフォームに着陸。

ぐふう

「…ああ、お嬢さん方？乗っかるのは好いんだけど、もうちょっと静かに出来ない？勢いで痛いんだけど。」

「これだからジジイは…。」

「枯れ木みただけど、枯れ木より脆いのね。」

ひでえ。

「もつと年寄りを労わっても良い気がするのは気のせいだろうか。」

「妖精に言われてもね。」

「人みたいなことを言われてもね」

「そもそもどつちが年上やら」

えっ

Stage:02「三光ゲーム」(後書き)

爺の喜劇'XX

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8675/>

---

東方珀中夢 ~ Where is a dreamingdream? ~

2011年10月8日03時21分発行